前田河広一郎「ミカドの鶴の間」読解

鍵本　有理　　髙橋　美帆

A Reading of Koichiro Maidako's “The Mikado's Crane-room”

Yuri KAGIMOTO and Miho TAKAHASHI

As the result of his stay in US (1907-1920), Koichiro Maidako (1888-1957) left some novels and essays in English. Since he came back to Japan, he had never returned to English writing, because he hated what they call “Japanism” which Americans and Westerners expected him to express in writings. Thus, no Japanese translation of his work had appeared, either. This paper introduces one of such typical works “The Mikado's Crane-room” with its first Japanese translation, and surveys the elements of “Japanism” expected and expressed in the work.

1，はじめに

文学は、その社会との関わりなしには存在しない。

前田河広一郎（1888（明治21）年～1957（昭和32）年）は、1921（大正10）年に短編『三等船客』を発表し、以後在米日本人の移民生活を描く作家として、また左翼文学の論客として注目された。しかし今日では『三等船客』と、恩恵を受けた徳富蘆花についての評伝「蘆花伝」等でわずかに知られるのみである。

彼のおよそ19歳から32歳にわたる在米生活が、小説の題材となったことはもちろん、思想形成に大きく影響を与えたことはいうまでもない。アメリカで地を這うような労働生活を続けながら、彼はまず英文で小説を書いた。それは、大逆事件を題材とした“The Hangman”（「絞刑史」）[1]のように、日本を海外から見た視点を生かした作品であったり、“The Twentieth Century”（「二十世紀」）[2]のように、近代化社会（ひいては資本主義社会）に対する批判を込めた作品であったりした。しかし一方では、アメリカの人々の求めに応じて、「キモノ」「ゲイシャ・ガール」といったエキゾチックな日本美を描くこともあり、これが後に彼が英文を捨てる理由ともなった。

本稿ではその代表ともいえる“The Mikado's Crane-room”（「ミカドの鶴の間」）を取り上げ、論じることにする。アメリカという大国に対し、時には迎合しつつも、また日本という国の在り方を模索する前田河の姿勢は、当時の日本の姿そのものでもあり、また今日でも検証の意義があると考えるからである。

2，“The Mikado's Crane-room”（「ミカドの鶴の間」）紹介

本作品は、在米の社会主義者金子喜一とジョセフィン・コンガー発行の雑誌“The Progressive Woman”に1912（大正元）年11月発表された。西村頼男による紹介[3]があるが、まず日本文学者の便を考え、以下に拙訳を掲げる。人名については片仮名表記とする。

ミカドの鶴の間

「あの、巣鴨の保護施設にだって奴以上に振る舞う変人はおりませんよ。別に鼠を象とは云ってませんぜ。本気で云っているんですぜ、旦那。エックドーは芸術家なんかじゃなくただの変人だってことに、うちの店中の魚を賭けてもいいですぜ。」

トーゾーは魚屋で、広い東京のこの人里離れた一角に店を構えていた。まだ愛宕山の付近には文明開化の雰囲気が漂い、この通りに住む人々は、騒がしいモダニズムに起こされないまま、古い封建時代の甘い催眠状態にまどろんでいた。トーゾーは、催眠にかかった手を動かして告げ口をする仕草をしながら、葡萄酒杯を置いたとこ

ろだった。その手の動きは、生まれながらに並んだ魚の前で居眠りをするトーゾーの住む、のろりとした古風なこの通りに特有なものだった。

タバラ氏は、檸檬色の酒の熱燗を再びトーゾーの杯に注いだ。彼は古い漆塗りの卓の向かい側に座っていた。今や五杯目の杯を、半ば商売上の半ば本能的なお辞儀をしつつ、トーゾーは受けた。彼は年寄りの大道藝師が得意な魔術を、物見高い見物人に披露しているときに見せるような我慢強さで、自分自身の会話を楽しんでいるようであった。それで五杯目の杯を飲み終えたとき、彼は自分の大きな扁平ったい手の平で口角を拭い、小さな目（それは大きな鮭の目に似ていた）で陽気に瞬きをし、その噂話を再開した。

「ねえ、旦那がせがむように、お隣のことで知ってることは全部お話ししますよ。さアまず最初にはっきり言っておきたいのは、奴の卑猥な振る舞いだ。それを見りゃあ、奴がどのくらい狂人の部類に入ってるか、おわかりでしょうよ。俺ア、この立派な通りに一万五千以上の昼と夜の間住んでおりますが、奴がやってアがるような汚いことは一度だって聞いたことも見たこともございません。まあ聞いてくださいよ、奴は、自分の女を丸裸にして部屋のあちこちで踊らせて、その間、自分は酒を鯨飲みして、絶えず「羽衣」の一節を口ずさんでいアがる！　おまけに真っ昼間、地下穴にいるモグラでさえカンテラに火を付けないような時に、エックドーは蝋燭を燃やすんでサ、それも五本、六本、七本と ― ―ダース以上も。そのうえ、女がすっかり疲れ切った後で、奴は自分の唇を噛んで、一滴一滴葡萄酒の杯に滴るのを見つめ始めるんだ－血ですよ！　それから、奴はたまった血を白い葡萄酒瓶に注いで、狂ったように笑いアがる。もし奴と俺の家との間に仕切りがなかったら、死んだ魚でも再び生き返りそうなくらいですぜ。

「ああ、なんておぞましい話だ……一体誰が奴のことを芸術家だなんて云ったんですかい。

「もしそうだとしたら、奴はきっと地獄からやってきたんだ。地獄では幽霊や小鬼たちと一緒に青い炎を描いていたんだろう……そして奴の女 ── あの女のきれいな顔立ちといったら！ ── 気でも狂ったみたいに奴に惚れているんだ。奴らがここに越してきてから、あの女が寸時でも奴から離れたところを見たことがないほどですよ。

「どんな算盤をはじいたって、正気じゃない奴に惚れてから女も狂ってしまった勘定に違えねえ。ふふん、あの狂った悪魔めらが！　数ヶ月のうちに、奴らはきっと、あの呪われた行いでこの神聖な通りを滅茶苦茶にしてしまうに違えねえ。あの家をのぞき見したら、誰だって奴らのように気がふれてしまうからナ。」

トーゾーは話すのを止めて、杯に注がれた温かい酒を一息に飲み干した。それから、この「紳士」を、意味もなくしげしげと眺めた。タバラ氏は気前よく、トーゾーを魚屋の向かい側の旅館でご馳走した。タンノ・エックドー氏の家の戸を半時間以上叩いても中から返事がなかったので、彼について一寸でも情報を得るためだった。

タバラ氏の上品な役人風の顔には、芝居がかったような、眉を寄せた深刻な表情があった。一方、彼の唇はその見事なヴァンダイク風の髯の下で、この状況について、およそ次のようなことを呟いていた。

「裸の踊り……蝋燭……血……羽衣！　ああ、鶴はどこに居るんだ。明日の晩までに彼が描かねばならない千羽の鶴と、これらが一体何の関係があるというのだろう。」

それから、彼は伏せていた目を上げて、魚屋にぶっきらぼうに尋ねた。風にはためいている旅館の緑色の日よけとはすかいに、彼の目に映ったのは、退屈な薄汚れた色の通りだった。トーゾーの店とその隣の家が、春の夕方、まるで灰色の底なしの深みに刻一刻と沈んでいくように立っていた。

「それでは、彼が何かを描いているところを全く見たことがないのだね、君」

「いやあ、旦那、それが困るんでサア！　あの針鼠のようなぼさぼさの長い髪や、鋭くって落ち着かない目をした彫りの深い顔を見たら、誰だって簡単に唆されてエックドーは芸術家だと云うでしょうよ……だって芸術家はいつも風貌が変わってると決まってらア。でも奴らが隣に越してから、かみさんも警官も絵筆や画架や顔料の跡なんて見たことないね！

「その上、奴は昼間は外出しないんだ。ササはこの通りで一番気っ風のいい男なんだが、奴があの女と真夜中に外にいるのをしょっちゅう見るって云うんだ。吸血鬼の翼を付けて、外に出るに違いない。だって俺はこの三ヶ月間一度も隣の家の物音を聞いたことがないんだから。さて、旦那のお望み通り、俺の陳述を終わるとしよう。一言で云えば、タンノ・エックドーは、俺の一番の印象じゃ、たとえ丸太が魚の匂いを出したって、芸術家らしい匂いは全くしないね！」

「おゝ、よくわかったよ。それでは君は彼が何かを描いているところは全く見たことがないのだね。できるだけ早く報告するとしよう。」

そう言いつつ、タバラ氏は、通りを横切ってエックドーの暗い古い家を再び見つめた。その扉は、神秘的な灰色の薄闇の手によって封印され、古い棺桶のように固く閉まっていた。朽ちた門の脇にある、うなだれたほこり

っぽい柳の下にある黄色い土壁の中では、生きものの気配が全くないようだった。

しかし、彼は我が目を疑った。突然、その家の欄間窓に向かって光が閃き、驚いて取り乱した叫び声が発せられた。トーゾーは、酔っ払って赤銅色の顔をしながら、その「紳士」がぎくっとするのを見た。それからゆっくりとタバラ氏に尋ねた。　「あそこで今、何があったんでしょうかね。……蝙蝠と一緒に魚が飛んで逃げていやせんかね。」

「そうじゃない、家の中から明かりが見えたのだ！……あそこで何かあったんだ！」

タバラ氏がトーゾーに答えるや否や、家の木の戸が開くかすかな音がして、電光の閃きが古い障子を照らした。その光はだんだん強くなり、中から狂った声が続いた。まるでこのうなだれた通り全体を起こすような、気のふれた調子の話し声だった。

「さア、もう一回行くぞ、オシマ！すべての瞬間が私の人生にとって大切なのだ……二十四の聖なる時間しか残っていないのだ！急いでくれ！」

「ああ、奴だ！　旦那、あれがエックドー氏です！ほら、奴が出てくる、帽子もかぶらず、あんなに急いで。はて、えっとそれから女だ。手に持っているのは何だ？　あれだ、あれだ！……奴が自分の血でいっぱいにした葡萄酒瓶だ！」

あの灰色の柳の下で、男と女の姿は道に迷った一組の幽霊のように少しの間ぐずぐずしながら立ち止まり、それから、静かに南に向かってよろよろと歩いた。

「まったく奇妙なことだ！　皇居へ行くところなら不思議はないが……おそらくついに彼は着想を得たのかあるいは霊感を得たのだろう！　では彼らの後をつけなければ。」

こう独り言をつぶやいて、タバラ氏は突然立ち上がって旅館の階段の踊り場に向かい始めた。その時、トーゾーは疑い深く、手を広げて彼を留めながら、急いで尋ねた。

「しかし俺にはこの出来事がさっぱりわからない！あれは何だい？　旦那、どうか説明して下さいよ。」

「だめだ、時間がない。さアこれは御礼だ。取っておけ！」

投げられた銀貨が暗赤色の卓の上で踊った時、既にタバラ氏はあんぐり口を開けているトーゾーを残して去っていた。しかし、ぼんやりとした二つの人影を追って一ブロックも歩かないうちに、彼は袖を引き戻された。

「ああ、旦那様！　噂話の礼にしちゃア、これはもらいすぎです！　どうか納めておいて下せえ。もし魚屋の罵詈雑言に五十銭も下さるぐらい気前が良いんなら、代わりに、後をつけている二人の狂人のことを説明してもらえませんか。」

正直者のトーゾー、いつも寝ぼけたトーゾーが、魚臭い手に銀貨を握りしめ、あまりにおずおずとお辞儀をしたので、タバラ氏は奇妙に可笑しさの混じった哀れみに心打たれるところだった。微笑は次第に愉快な笑いへと変わっていき、彼はこう答えた。

「では、一緒に行こう！　この銀貨も事の次第も君のものだ。どういう訳か君が気に入ったよ。犬のようにつきまとう素朴な好奇心を、君は持ちあわせている。だが、彼らを見失わないようにしよう。」そして、タバラ氏は尾行しながら事情を説明した。

皇居の外交用迎賓室が建て直されており、数ヶ月前、黄金の襖に描かれる襖絵を除き完成した。皇居の装飾部の総監督者であるオタニ男爵閣下は、ある画家に、正統な日本様式で中国製の白や黒や朱色を用いて千羽鶴を描くよう命じたのだった。

その画家がタンノ・エックドーで、京都の有名なオガタ・カンドーの弟子だった。丁度二ヶ月と二十九日前、皇居の画室で試験をした後、彼にその命が下された。以来、彼から連絡を受けた者はない。画室にも鶴の間にも彼は全く姿を見せなかった。二ヶ月経って、男爵は落ち着かなくなってきて、タンノの居場所を見つけるために東京へ何人か人を送り、京都にも至急電報を打った。さらに無駄な調査をして、男爵は別の画家に任せることに決めた。しかし、タンノは当代の日本画家の中で唯一の鶴や鸛の専門家である。それで男爵は、自分の地位と名誉とに賭けて（というのも、もし六月一日までに迎賓室が完成しなければ、来る皇居の宴会もまた延期しなければならなくなり、それは男爵にとって重大な「クビ」の問題となるからだ)、この不可解な画家との契約に執着し、エックドーを見つけるために多くの画家を画室から派遣し続けた。

タバラ氏に偶然そのくじが当たり、調査役を務める画家の一人として、常軌を逸した鶴専門画家の家を突き止めることになったのだった。

「……それで知っての通り、私は昼からここに来て一時間以上も戸を叩いたが、君も気づいたように、中から返事はなかった。しかしここで今……我々はついに家の外で彼をとらえた。道筋から判断すると、彼らはこの馬場先門通りにやって来ており、皇居に向かっていることは間違いない」

タバラ氏は話を終えた。魚屋はその話を、非常な驚きをもって聞いていた。二人は皇居へ入る最初の門をくぐった。蓮の匂いのする堀の橋を渡り……長い長い松並木を辿った。その間ずっと、絹のような夜霧の中に、皇居

の灯りが遠く見えていた。

二

かくて、タンノ・エックドーは、オタニ男爵が神経質に指を鳴らす元で、要求した。

「百本の蝋燭と、食料を少々、それから絵の具と筆、酒、その他必要な物を鶴の間に用意させるように。助手で婚約者のオガタ嬢をそこへ一緒に連れて行きます。そうしたら誰も我々を見張ったりしないよう、全部の戸と鴨居の明かり窓に入念に鍵を掛けて下さい。あなたの名誉をもってすれば、それぐらいの自由は私に与えられるでしょう？」

激怒した男爵の心を奇妙な魅力でとらえ、男爵の貴族的などっしりとした禿頭を、まるで気前よく「君の要求した物はすべて与えよう！」と言うように頷かせたのは、この芸術家の持つ力強く自惚れた男性的な声だけではなかった。時間という冷酷な掟により、男爵はそうせざるを得なかったのだ。この三ヶ月間、すべての時間が無駄に費え、ついに、最後の望みを賭けた、たった二十四時間が残された。そしてエックドーにとってそれは……何を意味するのだろう？

「他に何か欲しい物はあるかい、タンノ？」

男爵は好意を示したあと、右手をぐいと動かして、懐中時計を引っ張り出した。それはエックドーに急ぐように仄めかす仕草であった。この画家が他のどんな画家の力量もしのぐほどの腕をもっていても、一時間の内に描くのは鶴五十羽程度に違いない、と踏んでいたからだ。しかしながら男爵は、この高慢な画家の後援者となった時に発揮したあの天来の本能を失わず、この世の時空から離れて精神の気高い領域で仕事をする天才の超越した力を認めた。そしてこの最後の瞬間でさえ、どういう訳か、エックドーが約束したことを果たしてくれるだろうと思っていた。

「いいえ、男爵、明日までならこれで十分でございます。それでは、今すぐ仕事にかかります……その間、ぐっすりおやすみ下さい！　お任せ下さい、閣下の時計が明日の晩八時を指した時、陛下の神聖な鶴の間は壁一面、千羽の生きた鶴が羽ばたいている姿で仕上がっているでしょう！」

それから女とエックドーは、鶴の間に向かった。夜開く花で香り立つ庭を幾つも横切って部屋にたどり着くと、男爵に要求した物がすべて、その部屋にすでに届いていた。

しばらくして、この恋人達の風変わりな顔立ちが見えなくなると、男爵は電鈴を押してお気に入りのタバラ氏を召喚し、最後の鶴が完成するまで窓から見張るよう命じた。タバラ氏は忠実に、庭に面した部屋の窓の下に座り、何か物音や動きがあるのを待った。

時計がちょうど十時をさした時、黄金の襖の間にいるエックドーの、深い低音の調子が「羽衣」の吟唱を始めるのが聞こえた。その調べは高くなり、沢山の松葉が嵐に遭い音を立てるように震え、敏感な障子窓に震えて響いた。今や窓は、光り輝く蝋燭によって照らしだされていた。

「……私は羽衣を無くした天女……」澄んだリズムがこの部分に来た時、突然背後の躑躅の洞穴からタバラ氏に囁く声が起こった。

「穴を穿つんだ、旦那。そこじゃ、何も見えないよ。」振り向くと、黒い、苔生した石の上に大きな手が見え、それから、赤い獅子鼻、尖った下顎と小さな目とが、露を宿した花の中で見えた。近付くにつれ、それらは人の輪郭を取り、微笑んだ。

「君は、魚屋じゃないか！　どうしてまだここでぐずぐずしているんだ？　好奇心と愚かさの固まりなんだな、君は。さあ来たまえ、座ろう。音を立てるな！」トーゾーは薄暗い光の輪の中によろよろと姿を現し、あまりに低くお辞儀をしたので、彼の頭が芍薬の白い花弁に当たり、揺れたほどだった。

「お許し下さい、旦那。私の出番でないことはわかってまさア。でも、どういうわけか、心の奥底の良心が現れて、今まで知らなかった奴について話した酷い噂のことを、心配しているんだ。だから、明日家に帰ったときうちの怒りっぽいかみさんに何と言われようと、一晩中ここにいて奴が勝負に勝つところを見るって決めたんです。ああ、もっとよく奴のことをわかっていたら……。」

「彼のことを狂人だと非難したことを云っているのかい？」

「そうなんでさア。何て口が悪いんだ、俺は……だって俺は貧しい魚屋にしかなれねえんだから。もし、その人に魚を売ることでもない限り、偉い人に会うことなんてないだろうからな。」

「おい、やはり彼はそれだけの値打ちはあるぞ！一昼夜で千羽の鶴を描こうというとき、彼以上に気が狂ったようになる者がいるだろうか……奴の半分が神か精霊で、半分は悪魔か狂人だと、私自身云いたい気がする。」二人の間でこのような囁きが交わされている間に、室内の声は止んで、奇妙な静寂に包まれた。しかしながら、それほど経たないうちに、突然、大きなヒステリックな笑い声が聞こえて、静かな芳しい雰囲気が破られ、彼らははっとした。今や、窓を破って何が起こっているのかを見たいという抑えきれない欲求がトーゾーを襲い、そしてエックドーが恋人に話している声が聞こえてきた。

「さあ、これで北の襖は完成だ！今何時だい、オシマ？　たぶんもう真夜中だろう。なぜ震えているのだ？寒いのかい？……愛しい女性（ひと）よ、私のために君が自分をそんなに犠牲にするのを見るにしのびない！君が私と一緒に来てから、まず、君の家、お父さん、それから君の誉れを犠牲にしてしまった。そして今では、三ヶ月の間に、君の精神、魂……すべて、私のために！すべてがこの卑しい画家のために犠牲になったのだ！おゝ、神よ！私のようなこの馬鹿な画家に、君が丸ごと捧げられるのを見るのがどれほど苦しいことか！何という拷問だ！でも、愛しい君をそう長く苦しめるつもりはないのだ！　ああ、もう一度云おう、君の神授の助力によって他の三方の襖を仕上げたら、我々はついに自由だ。貧乏からの脱出だ……そうしたら君のお父さんも私たちの結婚に同意するだろうし、せざるを得ないだろう。さあ、私が絵の具を混ぜている間、もう少し酒を飲んで、身体を暖かくくるみたまえ。この鶏肉を食べるかい？泣くな、オシマ！　おい、泣くな！　私を信じて！輝かしい幸福の門に向かって行進している時に悲しむものじゃない。さあ、涙を拭いて。……自分のしたことがわからないのかい？　ご覧よ、鳥の中で最も神聖なものたちを。天国からの大勢の使いのように黄金の海を飛んでいる鳥たちを！　鳥たちよ、さまざまな違った姿をしているが、これは皆、君の魂、君の美しく白い魂だ！これが気に入らないのかい？　さあ、微笑んでおくれ、愛しい女性よ！」

「ああ、エックドー、愛しています！　愛しているわ！　悲しいのではないの。丁度美しい花を見た時に泣くのと同じように、あなたを見ると自然にとても嬉しくて涙が出るの！

「それに、あなたがこの部屋を完成させ、そして天皇陛下ご自身がこの部屋で外国の賓客を招待なさる時、あなたの名誉がまさに始まるのよ。この部屋はあなたという天才が自分の魂を羽毛に包まれた鳥の形で表現したところであり、輝かしい未来があなたを待っているところ。ああ、まさにそのことを考えると私は泣きたくなるの！……男爵が明日この戸を開けて、あなたが心血注いで描いたものを見るまで、誰もあなたがこの三ヶ月間どれほど骨折ったか理解できないでしょう！

「でも、お顔の色がとても悪くて、やつれていらっしゃるわ。ああ、あなたは無言で努力を重ねて、苦労をして……すべてはあなたの愛のため！　私たちの愛のため！　あと三枚の襖を描き上げた時も、私のことを愛してくださるかしら。私の父が京都からやって来て、あなたの仕事を見た後で、私たちの結婚を承諾することはもちろん、あなたの弟子の身分を回復することも許してくれた時も、愛していてくださる？　今と同じようにいつも私を愛してくださる？」

「いつまでも愛しているよ、いつまでも！たとえこれらが毒人参の絵の具であったとしても、君への愛のために飲まなければならないものなら、微笑んでそれを飲もう！　私の人生は永遠に君のものだ。私の美の聖堂は、君、オシマだ！君の聖堂にこの苦しい魂を閉じ込めて、君の接吻で封印してくれ！……」

あの寝ぼけのトーゾーは、仏陀の銅像のようにおとなしかったのだが、突然夢中になって我慢できなくなり、タバラ氏の袖を引っ張って、のぞき穴を作ってやろうとした。しかしタバラ氏を見ると、瞑想のあまりに花の中に頭を埋めていたので、トーゾーは起き上がって石に足をかけ、そこから唾で障子をぬらし、親指を押しつけて、音もなく、二つの大きな穴を開けた。さらに、今度はエックドーが、「羽衣」の美しい一節を歌う声が聞こえた。時には低く、時には空まで高く……。

「おゝ、見て下せえ、旦那！何て力強い筆遣いだ！ああ、あの美人の踊りといったら！なんて美しい姿なんだ！さあ、来て！覗いてみなされ！」

トーゾーは、半狂乱になってタバラ氏の手を引っ張ったが、タバラ氏は渋々従った。というのも、彼は育ちがよすぎて、こっそり窓の穴を覗くことなどできなかったからだ。

見よ！その広大な、埃ひとつない部屋の情調に、たくさんの蝋燭が燦燦と金色に輝き反射し合うなか、ちょうど、まばゆい南の襖の側に、百合の花のように白い、若い女性の姿が見えた。夢のような昔の古い太陽の宮殿で、目もくらむばかりの黄金の門の前で踊る妖精の女王のように、その女性は蝋燭の前で、軽やかな足取りで浮かび上がっていた。

エックドーの黒い影が白い絵筆を手に握って、鼠を狙ってうずくまっている猫のように、女の近くに付き従っているのが目に留まった。エックドーは踊っている女の影を追って、神業のように力強い完全な動きで、白い絵筆を襖にさっと走らせた。それを見て初めて、タバラ氏は彼らが何をしているのかわかった。

「何という構図！おゝ、何という筆さばきだ！何と骨の折れる作品だ！……今、女の手があがって、羽があがり、そして彼の絵筆があがる！そら、今度は女が飛び降りる。ああ、何と壮大な画風なのだ！」

息もつかず、タバラ氏はこうつぶやいていた。北側の壁に二百五十羽の鶴が既に描かれ、日没の輝きの下、李の花が銀色の雨のように輝いていた。そこに彼はまさしく傑作を認めた。実際の半分ほどの大きさの鶴が、それぞれ違った格好をして、皆青い海に舞い降りているとい

う構図で、それらは清らかで芳しく、床の手織りの敷物の上で、神々しい羽を羽ばたかせ、嘴は空を漂っているように動いていた。

「踊っている女から鶴のポーズを取ってるんですねエ」

トーゾーが目をぱちくりさせながら囁いた時、タバラ氏は両手をそっと組んで、この芸術の王を拝んでおり、それはとても自然で、反射的になされていた。

「あの方に神のお恵みを！旦那。あの人は本当に芸術家だ！間抜けな魚屋の俺は、狂人だとか訳のわからないことをよくもまくし立てたもんだ！……この重罪を償うために、これから三日間断食して、三ヶ月はもう一滴の酒も飲まないぞ！」

「しっ！静かに……おいおい、そんなに大声を出すな！とにかく二人の仕事ぶりを見るんだ。」不思議な恋人達に呼び寄せられて、女の踊りに加わるために天国から降りてきたように、南の襖に一羽一羽、鶴が描かれていた。画家が時折「羽衣」の数節を繰り返して歌い、それに合わせて女が踊るのだが、男が歌をやめ一息つきながら女を見つめる時はいつでも、女の目は恋人への愛情で輝くのであった。

タバラ氏がこのように、二人の仕事ぶりを見張り出してからどのくらい時間が経ったのかわからなかった。崇高な喜びで胸は高鳴り、金や白、黒や青の、未知の世界にいながら、魂はもはや生身の身体から抜け出たように感じるほどだった。

「あの葡萄酒瓶を見ろ！一体彼はあの血を何に使うつもりなんだ？ああ、やっとわかったぞ、鶴の頭のためだ！鮮やかな色だ。茹でたロブスターの殻よりもずっと赤い！まさに芸術じゃないか。……何て美しいんだ！」トーゾーがタバラ氏の肩を掴んで揺さぶったとき、彼の顔は輝いており、ようやくうっとりとした恍惚状態から醒めて、夜が明けてくるのを知った。

「さあ、これでさらに二百五十羽だ！」タバラ氏は、エックドーが女に話すのを聞いた。そして突然、女の甲高い悲鳴で画家の言葉は遮られた。

「どうしたんだ？あっ、君の髪が燃えている！蝋燭だ！オシマ、早くこっちへ！」

二人の男は再び目を窓に釘付けにして、部屋の中で、輝く蝋燭の光が女の美しい身体に転げ落ち、女が木偶のように力つきて畳に倒れ込むのを見た。

次の瞬間、エックドーが真っ青な恐怖におびえた顔をして、電気ショックを受けたように女の方に行った。気絶した女の抑えた呻き声と、髪の燃える匂い、青いもうもうとした煙とエックドーの激しい動きの後に、彼の狂ったような叫び声が続いた。「助けてくれ！助けてくれ！火事だ！火事だ！」

がしゃん！がしゃん！がしゃん！　トーゾーとタバラ氏は障子を打ち壊したが、中に入れないことがわかった。窓には頑丈な鋼のかんぬきがかけられていたからだ。

「戸の錠を開けて下さい！」

タバラ氏の声が中の画家に応えた。「男爵が鍵を持っている！早く、我々は焼けてしまう、助けてくれ！」

息の詰まる煙でのたうち回りながら、恋人達は死にものぐるいで走り回った。その足元の青い畳に炎が徐々に燃え広がるのにつれて、部屋の中で何かがぱちっと砕けた。

「何とか戸を打ち壊してくれ、男爵のところへ行ってみんなに知らせてくるから！」

色とりどりの庭の覚めやらぬ花の間を、タバラ氏が弾丸のように駆け抜けていった後、トーゾーは一人残されて、どうすることもできず、巨大な建物の戸を押し開けようとしていた。堅牢な雨戸に頭から体当たりしたが、さながら山腹を砕こうとする蚤のようだった。

「オシマ！」

「エックドー！……私たち、死ぬわ！」

「ああ、何て息が詰まるんだ！煙が！火が！……さあ、こっちへ、私にしっかりつかまって！　愛してるよ、一緒に死ぬのだ！……君と私と！」

既に黒い煙が鶴の間全体に満ちて、炎はむさぼるように欄間窓にまで跳ね上がっていた。熱くくすぶった欄間窓の横木のかけらが魚屋の頭上に落ちてきたとき、彼は最後の力を振り絞って、錠のかかった戸に徒に向かっていた。

「火事だ！火事だ！火事だ！」彼は激しく叫んだが、突然、窓の固い鉄の横木から黄色い炎が吹き出したため、茫然となった。その窓の下では女が、苦悶の表情を浮かべて、白んできた東の空を狂ったようにじっと見つめたが、結局絶望の中、再びおびただしい煙の中に沈んでいった。

「もうだめだ！……もうだめだ！空が暖まるほどに燃えている！」トーゾーはあらゆる手段を使い果たして、惨めに躑躅の石の上に座り、熱い悲痛の涙を一滴一滴と流し始めた。

「おいで、おいで、オシマ、落ち着いて！私につかまって！……我々は焼け死ぬ！しかしこのままでは死なないよ。天井が崩れ落ちてくる前に、最後の荘厳な努力をして、私の五百羽の鶴に魂を吹き込もう！さあ、襖の方を向いて！この焼け付くような唇で神々への最後の祈りをしよう。我々の命をあの鳥たちに託したまえ！」

エックドーの力強い、血を吐くような声が、炎のしゅうしゅうという燃え上がる音に混じって低く聞こえ、それから、何もかもが壊滅したような底知れぬ沈黙が一、

二分続いた。……身の毛もよだつような無音状態！……それから、有史以前の森林で無数の木の葉が目覚めるような、生き物が群がって混乱して動くような音が聞こえてきた。その音はだんだんと大きくなり、とうとうトーゾーが頬から手を離した時には突然、窓の鉄の横木の間から、鳥たちが全力で駆け抜けるようなひゅうっという音がして、一群の白い、羽ばたく翼が飛び出してきた。

「化け物だ！…… おゝ、鶴だ！火から逃げているんだ！」

一羽また一羽と、その細長い首の、鋭い目をした、くねくねと動く足を持った白い生き物が、混乱した一団となって、悲しげな声で泣きながら、亡霊の一隊のごとく、昇りかけた朝日に向かって飛び去った。そして最後の鶴が飛び去った時、半分燃えた重い天井が、赤い火の粉を散らした炎と煙の大竜巻と共に地面に崩れ落ちた。

消防士達を連れてタバラ氏と男爵が黒焦げになった鶴の間に集まってきた時には、何もかも遅すぎた。彼らは、トーゾーが石に座って、無言で燃えさしを見つめているのに気付いた。

タバラ氏がトーゾーの肩を揺さぶった時、その一介の魚屋は狂ったように笑い、突然激しく叫んだ。　「気の毒な悪魔ども！……五百羽の鳥！……とても美しい翼！……ああ、一緒に飛ばせてくれ！……エックドー、お前の羽をくれ！」

そしてその瞬間から、世間の人は彼が正気ではないことに気づいたのだった。

3，その素材・表現

まず題材であるが、全編を通して出てくる「羽衣」は、いわゆる「羽衣伝説」として有名な謡曲がある。原文に“... I am an angel who has lost his wings... ！”とある箇所ははっきりとしないが、謡曲にはシテ（天人）の「今はさながら天人も、羽なき鳥のごとくにて、」あるいは「悲しやな羽衣なくては飛行の道も絶え……」のようなくだりがある[4)]。また『日本音曲全集　長唄全集』下巻（中内蝶二・田村西男編、日本音曲全集刊行会、1928年8月）には、明治31（1898）年に歌舞伎座の一月狂言で「新古演劇十種」の一として演じられた、謡曲の「羽衣」を俗に砕いたものや、この小説より後のものではあるが、大正7年発表の「新曲羽衣」が収められており、長唄等でもよく知られていたようである。

次に、前田河の絵画に対する関心の高さについては既に拙稿[5)]で述べたとおりではあるが、主人公のタンノ・エックドーは京都の有名な画家の弟子という設定で、「正統な日本の様式（原文：in true Japanese style）」で描く。「二十世紀」とは違い、やはり日本趣味のものを選んでいる。

この作品について、前田河自身は後に、

> 恥を話さないとわからぬが、『鶴』というのは、日本の画家に関する古い伝説に取材した、メルヘン的なもので、千羽の鶴を襖に描こうとした画師が、鶴のポーズを女の裸体に求めて、千羽の鶴の姿を映し終ったときに、その飛翔の姿を壁に投げかけていた燭が仆れて火災となる。あやうく火をのがれた画師が見ていると、その女の魂が鶴に移って、渦巻く火焔の中から、千羽の鶴が飛び去ったという話である。
>
> （『青春の自画像』1958年5月、理論社）

と述べている。

さて、ここで思い出されるのは、芥川龍之介の「地獄変」の題材ともなった「絵仏師良秀」の話である。良秀という絵仏師が、火事で自分の家と妻子の焼けるのを見ながら、不動尊の火焔の描き方がわかったといって喜ぶという、『宇治拾遺物語集』や『十訓抄』に収められているものである。また、女性をモデルに絵や彫刻を仕上げるというのも、物語や小説にしばしば見られ、これは「二十世紀」にも共通のモチーフである。

芥川が「地獄変」を発表したのは1918（大正7）年7月、一方「ミカドの鶴の間」は1912（大正元）年に発表され、また前田河は1907（明治40）年に渡米し、1920（大正9）年に帰国しているので、両者に直接の関わりはない。しかし偶然とはいえ相前後して日本とアメリカで、「芸術至上主義」という、19世紀末のヨーロッパを席捲した考え方を反映した作品が日本人によって描かれたことも興味深い。

前田河は帰国後、プロレタリア文学の論客として菊池寛を批判したことで知られているが、例えば『三等船客』を発表した翌年の1922（大正11）年に、「提灯を持たざる弁 ── 人気作家菊池寛、芥川龍之介、里見弴其他に就て ── 」（「解放」4巻5号、1922（大正11）年5月）でこれらの作家を批判している。この評論はまず、

> 何よりも先づ人でありたい。

という一文で書き出されており、また「人の切売、型に嵌めた芸術、 ── これでは偉大な芸術と見当がちがふ。」とも述べている。そして、

> 武者小路実篤を攻撃した時も云つたが、現実が芸術に掴み得ないで、それから背戻するのが芸術家ならば、芸術は永遠に過去の奴隷で終るだらう。プロレタリア芸術家が尊い所以は、些少の学問や、物質的な栄達に囚はれない処に、生地のままの苦しみ、反抗から来る高調した感情、生に対する深い疑惑

が、ぴりぴりと我々に迫つて来るからである。生命を打込んだ芸術、心理を熱求する思想の痕跡、階級としての偉らさでなくて人間としての偉らさが不可抗力に肉迫して起る悲劇、その壮大な悲劇、これあるが為めである。

とする。引用が長くなったが、「芸術」に対する後年の彼の考えを知ることができる。

また、「鶴」といえば、いわゆる「鶴の恩返し」の説話があり、前掲のように彼自身この作品を「メルヘン的」といっている。メルヘンという語は概して「童話」の意で用いられるが、由来はドイツ語のメルヘン（Märchen）で、日本では、巌谷小波(いわやさざなみ)が本来のメルヘンの意から「お伽噺(おとぎばなし)」と呼んで以来、空想性を持つ創作、という性質が賦与された。

本作品も、童話というよりは、ドイツ語の本来の語義における「メルヘン」であり、前田河もそれを意識して「メルヘン的」という表現を用いたと思われる。ドイツにおけるメルヘンには次の二種類があり、自然発生的に民間伝承されたのが「民衆童話」(Volksmärchen)、実在の作家が民衆童話の形式を借りて作るのが「芸術童話」(Kunstmärchen）である。本作品「ミカドの鶴の間」は後者に属することになる。

「芸術童話」の下地となる「民衆童話」のモチーフには各民族に固有のものと同時に多くの共通点がみられる。前田河の意図するとしないとに関わらず、「羽衣」や「鶴の恩返し」の説話が他国の民衆童話と共通性を持つことはよく知られており、本作品が世界の「芸術童話」という比較文学的領域で語られる可能性も追求できよう。

さらに、物語の結末では、狂言回しの役割をつとめるトーゾーが、精神に異常を来すことになっている。この要素を欠いたとしても、例えば朝日に向かって飛んで行く鶴と、炎の描写で物語として成立させることもできたはずである。そこでまず考えられるのは、「鶴の恩返し」をはじめとする、説話における「見るなの禁忌」の要素の影響である。こうした禁忌の要素も、各民族の持つ説話と共通するものであり、今後、比較文化の側面からこうした問題を発展させていくことも考えられる。

またこのトーゾーという人物については「正直者のトーゾー、いつも寝ぼけたトーゾー（原文　the honest, ever-sleepy　Tozo)」とあり、また始めの部分には「この通りに住む人々は、騒がしいモダニズムに起こされないまま、古い封建時代の甘い催眠状態にまどろんでいた。」「トーゾーは、催眠にかかった手を動かして……その手の動きは、生まれながらに並んだ魚の前で居眠りをするトーゾーの……」と、「sleepy」という語や「somnolent（催眠の)」「doze（居眠りする)」の語を多用している。

そこでこの結末は、「芸術家は時として常人に理解されないものだが、芸術家ではなく、その芸術を理解しない者の方が気が狂っている」というような耽美主義だけではなく、むしろ、欧米と比べて、まだ目覚めていない日本の国・天皇制をもつ国・臣民の人権問題等をも含めた国民の意識が低い国といった、当時の日本のありようを暗に揶揄しているように感じられる。居眠り状態（Sleepy）のトーゾーが、急激に（美に）目覚めたとたん気が触れる。そこに隠されているのは、日本の国の将来の姿への予見かもしれない。

作品全体としては、「絞刑吏」が「ショートショート風」[6]で、地の文の語りが多いのに対し、本作品では会話を生かした展開になっている。また「三等船客」が、特に主人公を定めない、集団描写に巧みであり、のちの葉山嘉樹「海に生くる人々」や小林多喜二の「蟹工船」に影響を与えたといわれている、その描写の片鱗を見ることができる。

4，むすび

「ミカドの鶴の間」は前田河本人も「恥」といっており、これは謙遜ではないだろうことは先に述べた。同時期に発表された「アジア連合」も「……愚にもつかぬ御話である。英雄気取りの主人公と、お芝居地味たピストル騒ぎと、あやしげな軍資金の入手関係など、探偵小説を日本の舞台で行った、ガラクタ小説である。」(『青春の自画像』p 133）とされている。「絞刑史」や「二十世紀」とは違い、題材として日本的な、アメリカ好みのものを使ってはいるが、しかしその語りなどに後の作品の習作ともいえる側面を見出すことが可能である。また、このようなアメリカ好みのものを提供した経験が、裏返せば後年、文壇の論客として他の作家を批判する素地になったとも言える。

やがて彼は「僕の社会主義というのは、やはり日本主義なんでな、このアメリカには向かないんだよ。」(『青春の自画像』p 169）として「英文を捨てる」が、この英文での習作時代があってこそ、日本という国を冷静に見、またその近代資本主義への批判を描くことができたのであろう。

《注》

1）藤沢全「前田河広一郎の“The　Hangman”発掘－THE COMING　NATION　所載作品－」(「国際関係

研究（総合編）」第20巻第3号、2000年3月）で紹介されている。

2）浦西和彦「前田河広一郎の英文による短編小説「THE　TWENTIETH　CENTURY」（「二十世紀」）の紹介」（関西大学「国文学」第83・84合併号、2002年1月）、拙稿「前田河広一郎「二十世紀」論―在米日本人作家の再評価―」（奈良工業高等専門学校研究紀要第38号、2003年3月）参照。

3）「《資料紹介》前田河広一郎の英文による短編」（「札幌商科大学論集　人文編」第32号、1982年12月）。本稿の日本語訳については西村頼男氏の許可を得て、この英文テキストを使用した。記して感謝の意を表す。

4）引用は『日本古典文学大系　謡曲集　下』に拠る。

5）注2に同じ、P.144。

6）藤沢全の指摘。注1に同じ、p.229～230。

《その他参考文献》

中田幸子『前田河広一郎における「アメリカ」』（国書刊行会、2000年10月）

『現代日本文学大系　59　前田河広一郎　徳永直　伊藤永之介　壷井栄　集』付録（筑摩書房、1973年5月）